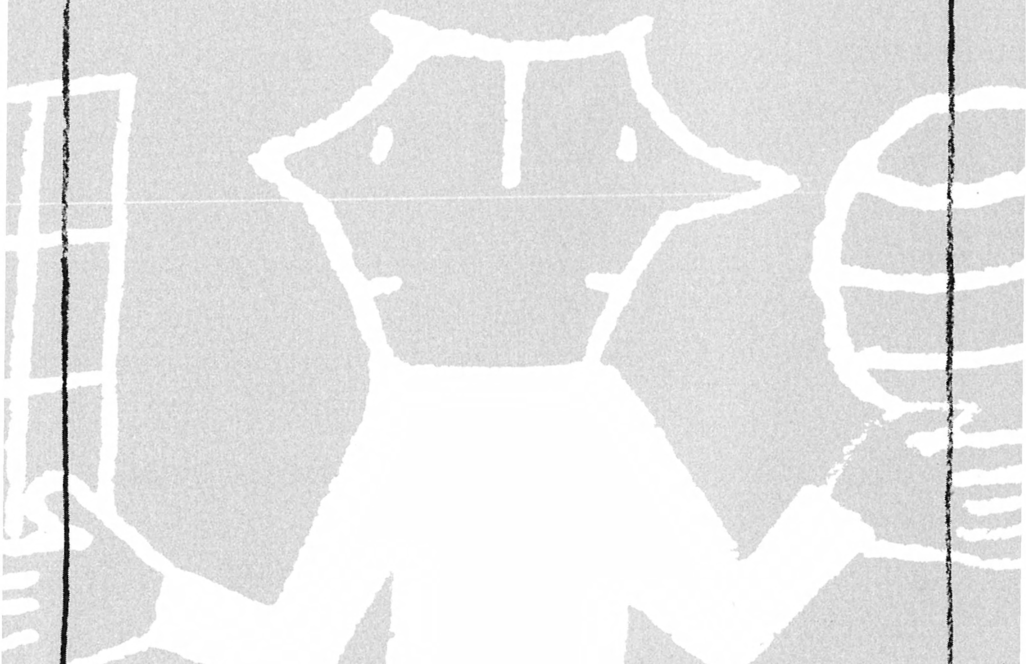
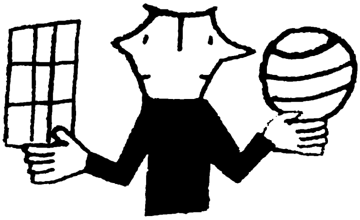
第5章

分野を超えて考える

学際的研究事始





フィールドワークによる研究に対して，「どういう方法論を用いるのか」と問われることがある．フィールドでの森羅万象を相手にする以上，どういう手続きで何を明らかにするのかを表明することが重要なのである．何を明らかにしたいかによって方法論を使い分ける――そんな柔軟な思考が求められる学際的研究に一歩踏み出すときの心構えを紹介しよう．

●キーワード：学際的研究，ディシプリン，概念的枠組み，柔軟な思考

はじめに

「方法」とはmeta-hodos，すなわちそれを伝わっていくことによって目的地に到達できる「hodos（道）」なのであり，それ自体が目的として存在するものではない．髭を剃るには「かみそり」が要るし，薪を割るには「鉈（なた）」が必要となる．分析の対象によって「方法」は異なるのである．「かみそり」では薪は割れないし，「鉈」では髭は剃れない．地域研究は特定地域の何を解明するかによって，ある場合には「かみそり」が要り，またある場合には「鉈」が必要となる．方法論，つまり対象に適用すべき「ディシプリン」をきめるのは，対象のもつ性質によるのである．（中略）身につけるべきディシプリンをきめるのは，対象である．地域研究者はその対象の要請に応じて，複数のディシプリンを学ばなければならないと私は考えている[*1]．

*1 石井米雄（2005）「「地域研究」と「ディシプリン」について考える」，『地域研究コンソーシアムニュース(2)』地域研究コンソーシアム

この文章は地域研究とディシプリン（学問分野）について書かれたものである．方法とは，単にインタビューのテクニックや質問表の作り方，測定方法だけを意味するわけではない．分析するときに援用すべきディシプリンの考え方（概念的枠組み）までも含んでいる．ディシプリンには，さまざまな試行錯誤を経て作られてきた概念的枠組みや分析手法が存在し，それらの中から，フィールドの何を解明するかによって，適宜必要なものを学ぶ必要があり，決してその逆ではないことを述べている．引用文中の「地域研究」を「フィールドワークによる研究」，「地域研究者」を「フィールドワーカー」としても，まったく同様のことが言える．

フィールドワークによる研究では，ある特定の専門分野からだけでなく，さまざまなディシプリンの概念的枠組みや分析方法を利用することが多々ある．現場に存在する現実の人間社会は，さまざまな要因が複雑に絡み合って構成されている．さらに，フィールドワークによる研究は，実際の現場に起きていることを対象とする以上，多かれ少なかれ，複数のディシプリンの概念的枠組みや分析手法を取り入れた学際的研究にならざるを得ない．現場で，たとえば，経済学的な側面，人類学的な側面，医学的な側面などからの調査をおこなうことはもちろん可能であるが，ある特定のディシプリンで発達した概念的枠組みや分析方法を用いて現場を理解しようとすることは，現実社会の狭く偏った理解につながる危険性をはらんでいる．現場で何を解明するかによって，「かみそり」を使うのか「鉈」を使うのかの判断がフィールドワークによる研究では求められる．

本章では，フィールドワークにおける学際的研究について考える．学際的研究というと，個人研究であるか共同研究であるかを問わず，あらゆるディシプリンにまたがる膨大な情報を総合的に理解する特殊な能力が必要とされる研究のように聞こえるかもしれない．しかし，上に述べたように，フィ

ールドワークの現場では，常に学際的研究であることが求められている．本章では，本格的な学際的研究に至る最初のステップとして，個人がフィールドワークによる研究をおこなう中で直面する学際的研究の課題について考える．

タイ農村部における経済と社会の変容

本章で題材とするのは以下の論文（以下，鶴田論文）である．

鶴田格（1998）「貨幣経済の浸透と儀礼をめぐる社会関係の変容――中部タイの稲作村における冠婚葬祭」『東南アジア研究』36巻2号，pp.178－205.

鶴田論文が対象とするのは，タイ中央平原にある稲作先進地域の農村，K村である（写真5－1）．1960年代以降，タイの経済成長と軌を一にして，K村でも貨幣経済が急速に浸透してきた．その結果，個人を対象とした通過儀礼や積徳行だけでなく，世帯や親族でとりおこなわれる冠婚葬祭を含めて，K村で見られる宗教的行為の形態は大きく変化した*2．農業経済学を専攻した鶴田は，この論文で，1960年代以降の貨幣経済の浸透の中で，こうした宗教的行為の変容過程に焦点をあて，冠婚葬祭をめぐる贈与交換の形態がどのように変容してきたのかを検討した．

*2 積徳行（タムブン）とは，上座仏教徒が功徳（ブン）を積む行為のことである．主要なタムブンの行為として，寺や仏僧へのお布施や寄進，出家，寺院建立などが挙げられる（鶴田論文の注6参照）．

冠婚葬祭の形態とその変容

K村における冠婚葬祭は，1960年代から90年代の前半にかけて大きく変容した．鶴田論文では，とくに得度式と結婚式に焦点があてられ，その変容について説明がなされる（写真5－2）*3．

*3 得度式とは，出家してお寺に入門するための儀式である（鶴田論文の注8参照）．

一般に，得度式や結婚式などの祝い事は，かつて，宗教的な手続きとしての儀式と，来賓をもてなす祝宴とに分かれて

写真5-1 仏教国タイの農村における日常のひとこま．早朝，僧が各農家に托鉢してまわり，食物の喜捨をうける．
（1991年，K村．撮影：鶴田格）

写真5-2 結婚式の朝，村の老人たちの祝福を受ける新郎新婦（ラプ・ワイ儀礼）．
（1994年，K村．撮影：鶴田格）

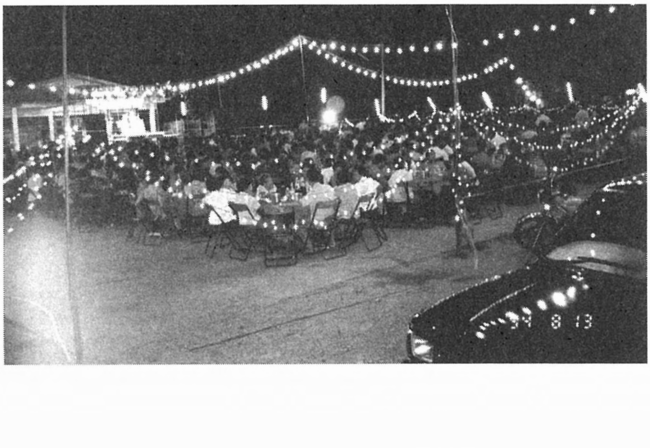


写真5-3 結婚式の夜の祝宴．数百人から1000人の客が参集．仕出しの中華料理が供され，ステージ（写真左奥）での出し物もある．
（撮影：鶴田格）

いた．しかし，現在，宗教的な儀式では，土着信仰にもとづくかつての儀礼がほとんど姿を消し，主催者側の何の準備も必要のない僧侶による30分ほどの読経（どきょう）のように，儀礼そのものは煩雑な手続きを経ず，費用も時間もかからない形態のものへと変化した．

一方，祝宴は，かつての自前の材料を使った手作りのタイ料理から仕出しの中華料理へと変化した．同時に，祝宴の規模が大きくなり，以前は裕福な農家のみがおこなったと思われる大規模な饗宴を，今ではより多くの農民がおこなうようになる傾向が見て取れた（写真5－3）[*4]．祝宴の主催者側は，金銭的にも労力的にも，儀式より祝宴に大きな力を注ぐようになった[*5]．

*4 祝宴に欠かせない余興も，かつては村人みずから歌い踊っていたものが，費用をかけてプロのバンドを呼んだり，移動式の映画などを上映したりするようになった．

*5 出費が増え大規模化することは，葬式でも同様の傾向にあった．

タイ農村における互酬性の規範

貨幣経済が浸透する以前のタイ農村では，世帯間の社会関係構築の原理として，人間関係の対等化を目指す互酬性の規範が大きく作用してきたことはよく指摘されてきた．自分の家の田植えを手伝ってもらうと，逆にその人の家の田植えもお返しに手伝いに行くというような，稲作作業における世帯間の互助的な労働交換だけでなく，財の対等な交換も含まれる．このような交換は，理念的には等価の交換を目指すものであるが，現実には，村人の間に存在する経済的格差や社会的地位，儀礼に対する趣向など，さまざまな差異を反映した運用がおこなわれるため，必ずしも等価であるとは限らなかった．たとえば，祝儀の額は各家庭の事情により融通がきくだけでなく，現金のない者は，式の手伝いをすることで現金の代わりとした．

冠婚葬祭をめぐる贈与交換の変容

貨幣経済が浸透するようになった1960年代以降，宗教的行為の儀式が簡略化され，祝宴の規模が大きくなった．そ

れに伴い，対等化を目指す互酬性の規範の運用に変化が見られるようになった．その顕著な例が，冠婚葬祭時に贈られる祝儀・不祝儀の変化である．高額の支払いが要求される中華料理が祝宴でふるまわれるようになると，祝宴に参加する時に渡される祝儀の額が100バーツに標準化する傾向が見られた[*6]．また，見返りを期待しない喜捨とみなされていた葬式時の香典まで，50～100バーツになり，返礼することも常識だと考える人が増えてきた．このように，かつては金銭だけでなくモノや労力の交換，見返りを期待しない奉仕活動など，さまざまな形態の交換が存在したが，60年代以降，貨幣による等価の交換へと画一化され，金額も増大化・標準化する傾向が見られたのである．

*6 1バーツ＝約3円

変容の理由を考える

上で述べてきたような冠婚葬祭時における贈与交換が変容した理由を読者ならばどのように考えるだろうか．

変容の過程は貨幣経済が浸透した時期に重なる．貨幣そのものがもつ経済的な性質を主な根拠にして考えると次のようになるかもしれない．「貨幣の基本的な性質，すなわち，明確な価値の尺度であり，簡便な流通手段であることが，貨幣経済の浸透とともに，かつては曖昧な部分も残していた贈与交換の運用を，より厳密にし，金額も増大させた」と．贈与交換の運用が，より経済合理的な原則にもとづいておこなわれるようになったと解釈することができる．

あるいは，かつての運用方法が，精緻で，かつ，きめの細かいものであったと主張したい場合，「村人の複雑な関係性の上に成り立っていた贈与交換の運用体系が，貨幣経済の浸透とともに破壊され，より画一的で例外を認めない厳しい制度運用へと変容した」と説明することも可能である．この場合，「貨幣経済の浸透は，歴史的に形成された村人同士の豊かな絆を破壊し，非人格的な契約関係に代替させられた」と

解釈されるかもしれない．

しかし，これらの説明・解釈は，いずれも一面的なものであり，本論文の調査地となったタイ中央平原のひとつの農村社会で起きていることを十分に説明したとはいえない．というのは，たとえば，贈与交換が変容した理由を貨幣の性質に求めると，貨幣経済が浸透した世界中のすべての地域で同様の現象が見られると考えられるからである．現実には，贈与交換のシステムが変容するかどうかは地域によって異なり，変容が見られたとしてもその程度は必ずしも同一ではない．すなわち，貨幣の持つ性質がどのように作用するかは，地域のさまざまな条件によって異なるのである．

また，豊かな絆（人間関係）が破壊され非人格的なものに代替させられたとする考え方も一面的な考え方である．貨幣経済の影響力は確かに強力であるが，かつての人間の絆をすべて破壊するわけではない．豊かな絆を作り上げていた人びとが，新しい経済原理のもと，新しい人間関係を構築しているのではないか，それはどのような人間関係なのか，かつての人間関係のどのような形成原理が残り，何が異なるのかを考えることによって，変容した社会における人間関係を深く理解することができる．

互酬性の論理

冠婚葬祭時における贈与交換が変容した過程を，鶴田は，経済合理的な考え方がかつての曖昧な人間関係の形成原理にとって代わった過程であると捉えるのではなく，また，かつての豊かな絆が失われる過程であるとも捉えなかった．そうではなく，貨幣の持つ基礎的な性質が，中部タイ農村における冠婚葬祭にかかわる既存の社会慣習上の諸傾向と結びつき，新たな人間関係の形成がおこなわれている過程であると考えた．貨幣経済の浸透によって，例外をあまり認めないような統一的な贈与交換システムが形成されると，かつての曖昧で

例外の多い互酬性の規範の運用が，融通のきかないものとなったのは事実であった．そのため，拒否したり倹約したりすることが困難な冠婚葬祭では，本人の意思にかかわらず出費が増大することになる．出費した分は取り返さなくてはならない．そこで，将来にわたって儀礼をおこなう予定のない家族が，特別な理由もなく「親睦会」と称する会を開き，他の世帯に与えた贈与分を取り返すような場を設けることがおこなわれるようにさえなったという．貨幣という明確な基準にもとづいて贈与交換がおこなわれ，貸した分は何らかの利子をつけて返さなくてはならないという暗黙の了解ができたのである．統一的な贈与交換システムの形成によって，以前から存在した互酬性の規範にもとづく対等化の論理がより強く作用するようになり，このことが，祝儀・不祝儀の額を増大させる方向に働いたと考えられた．そして，貨幣による贈与交換は，深い人格的なコミットをともなわない形での人間関係の創出と維持を容易にするため，村の内部だけでなく，外部にも人間関係が拡大することを可能にした．近隣村のそれほど親しくない人から祝宴に招待されることもまれではないし，首都バンコクやその他の都市に移住した人たちとも関係を維持することができる．すなわち，村の内部に対しては強制力があり融通のきかない贈与交換システムの形成は，一方で，村の外部に対しては人間関係の拡大とその維持を容易にするという側面もあわせ持っていた．貨幣の持つ基礎的な性質が，タイ農村の対等化を目指す互酬性の規範と連携し，さまざまな宗教的行為の変容を促したと考えられた[*7]．

*7 もちろん，鶴田本人が指摘しているように，論文で対象とした変容過程の分析には，宗教的な互酬的関係，経済発展や都市化の影響など，さまざまな側面から変容過程を分析する必要がある．

分野を超えて考える

ディシプリンには，特有の概念的枠組みや分析方法が存在し，それぞれが歴史をもった有効な枠組みや方法論であることは確かである．経済合理性をひとつの説明原理とし，すべて（あるいは大多数）の人間は経済合理的な思考のもとに活

動しているはずだと考える場合もあれば，人間はひとりひとりが異なり，それぞれの状況に応じて異なる思考様式や行動パターンをとるという考え方もある．仮にこれらの考え方をする両者が議論し，互いの主張を述べるばかりであれば，議論が噛み合う余地はない．

このことは，研究者間の議論の場だけでなく，フィールドワークによる研究をおこなうひとりの研究者の頭の中でも起こりうる．すなわち，現場を理解しようとするときに何らかの概念的枠組みからだけ見ていては，現場の理解を深めることができない恐れがある．現場を目の当たりにして，どのディシプリンが有効な概念的枠組みを与えてくれるのか，どの分析方法が適当なのかを最終的に判断するのは研究者自身である．ディシプリンもひとつの考え方である．その考え方や方法が現場で援用可能かどうかは，冒頭の引用で述べられているように，研究している対象によって決められる．その判断ができるかどうかは，究極的には，研究者がどのディシプリンを学んだかではない．より根本的に大切なのは，研究対象をじっくり観察しながら，研究者が自身の思考の枠組みを柔軟に変えていくことである．そうしてはじめて，フィールドでの現象を総合的に理解することができるようになる．

おわりに

フィールドの現象をあらゆるディシプリンを総合して学際的に研究することは，実は不可能に近い．かといって，あるひとつのディシプリンからのみ研究することは，そのディシプリンに貢献することはできても，フィールドの現象を一面的に理解することでしかないかもしれない．フィールドワークによる研究で大切なのは，ある概念的枠組みから得られた見方が，フィールドの現象を説明する上で，どのように有効なのかを十分理解することである．鶴田論文の場合，貨幣の性質による説明は，祝儀・不祝儀の額を標準化する方向に作

用したが，それだけをもって，金額が増大化することまでは説明していない．貨幣の性質が，タイの農村の慣習と結びついてはじめて，金額の増大化が起きたことを説明している．貨幣の性質に関する考察は経済学からの援用である．互酬性の規範に関する考察は，社会学や人類学からの援用である．しかし，貨幣の性質が，タイの農村社会の互酬性の規範と結びついたとき，どのようなことが起きるかは，それらのディシプリンだけでは十分答えてくれない．現場で起きていることから考えること．これが学際的研究の事始である．

（柳澤 雅之）